書　評

野口芳子著『グリム童話と魔女—魔女裁判とジェンダーの視点から—』
（勁草書房　2002年2月刊）

上杉　孝實
（龍谷大学文学部）

グリム童話に関する書は多く刊行されている。また、魔女裁判についても、上山正敏氏のものをはじめとして、いくつかの文献が目に入る。しかし、グリム童話を魔女との関連でとりあげ、魔女裁判とのつながりで論じ、ジェンダー問題の観点から解明を試みた本としては、野口氏のこの書が最初であるといってよいであろう。

魔女伝説を折りこんだ民話が、グリム兄弟によってどのように改変されたかを克明に洗うことによって、かつての魔女は善悪両面を持つものであったが、近代において両者の分離が行われ、そのなかで魔女＝悪の図式ができあがったことが明らかにされるのである。古い時代には、穢れと浄め、尊重と敬遠とが、両面性として同じ人の中に見出されたのが、その後別の人に割り当てられ、そこに差別が成立するのと重なるものが見られるのである。女性もそのような両面性をしだいにはぎとられ、マイナスイメージでとらえられるようになったといえる。

魔女の場合、近世にキリスト教がある種の合理化をはかって土着信仰との訣別を進めるなかで、排除されるべきものとなっていく。著者は、その主要な担い手になったのが当時の学識法曹などの知的エリート男性であり、女性を禁欲の妨げとして悪的存在とみなすところから、魔女狩りが盛んに行われるようになったとみる。ここでは、キリスト教の善悪二元論と近代における分化の論理とが重ねられていて、それらが男女における支配—従属関係を合理化する価値の配分、序列づけとつながっていることが示されているといえよう。

しかし、女性が無力であるなら、魔女狩りに見られるようなすさまじい迫害はなかったとも考えられる。著者は、民衆の中でも、女性の産む力、ものをつくり出す力、なかでも生存に欠かせない食物をつくる力に男性が魔術のような恐れを抱いたことが、このような迫害を支えたと見る。とくに、自分たちの地位を脅かしかねない女性の動きに対する男性職人の防衛的反応もあったことが指摘されている。

グリムは、19世紀にこのメルヘンを編んだので、近代キリスト教の影響を受け、その観点からの改変を行っているが、もとになった、民衆の中で語り継がれてきた話では、魔女はたいして悪い存在ではないといわれる。民衆の場合、自然に基礎を置いた土着信仰、呪術の世界に生きてきたので、魔女もその影響を受けていて、もっと多面的な顔を持つのである。日本のおとぎ話も、善悪を超えたものであるが、昭和初期の講談社の絵本に象徴されるように、道徳教育に用いられるようになると、勧善懲悪的に改変されてしまうのである。

多少とも脱呪術化がはかられる近世において、呪術的なものに乗っかった魔女狩りが行われるというパラドックスが注目される。この書は、グリムの昔話の扱いから、見事に魔女像の不連続面を明らかにしたところに意義があるが、同時に連続面にも目を向けてみなければならない。著者が示

しているように、学識法曹が描く魔女が男性を誘惑する若い女性であったにもかかわらず、裁判で処刑された多くの女性が、昔話に出てくる魔女と同じ年老いた女性であったというあたり、民衆の意識を無視しての裁判は困難であったと考えられる。民衆も、病気や不幸の原因を何かに帰さずには安定できないことから、特定化した女性を魔女と信じて訴えることになる。魔女裁判には政争の具となったものもあるといわれているが、近世以前においても、共同体内での対立の中で魔女の働きに原因を見出すことはあったと考えられる。近世において、隣人愛に満ちた町や村があり、家族愛に満ちた大家族があったというのは幻想であるとの記述もあるが、それ以前もそれに近いものがあったことが想定されるのである。近代批判は前近代評価に簡単にはつながらないのである。

グリムの収集した話は、魔女裁判が盛んであった時期を通じて語られてきたものであるが、それだけに、どこまで近世に先立つものなのか、また、魔女狩りの影響がないものかなどが気になるところである。グリムの改作もさることながら、民衆におけるとらえ方が一貫したものであったとも考えにくい。もっとも、それにもかかわらず、グリムの改作への着目が、それ以前の話の民衆性をクリアにしていることの意義は大きい。

昔話には、子どもの成長過程を示すものが少なくない。子どもの成長を促しながら、子どもが自立したり、自分に対抗できるようになることを阻むアンビバレントな親の姿勢が、メルヘンとして描かれている。とくに女の子と母親の関係がよく出てくる。これについても、グリムが実母を継母に変えたことがこの書で指摘されている。実母のあり方として、子どもの成長を妨げるのは好ましくないとの配慮の結果と解されるのである。しかし、現実には、親にこのような両面があることは事実で、そこに民話が、善悪を超えて人間の真の姿を象徴的に語っていることがうかがわれるのである。

なぜ母娘関係が中心になるのか、なぜ王子が登場して救う場面が多いのかについても、ジェンダー問題の視点からの解明が求められるところである。魔女の魔術が女性から女性へと伝えられるとされたのと無関係ではないであろう。かつては、女系の意味が近代以上に大きく、それを維持しようとする力とそこから独立しようとする力との葛藤があり、かなり理想的な男性にめぐり合わないと後者に傾くことが容易でなかったということであろうか。このあたりこの書では現代的解釈が試みられている。

近代主義を批判的にとらえる著者は、グリム童話の原型に、大地母神の豊かさを見出す。このことは、環境破壊や正義の名のもとの報復戦争などの問題に直面している今日、重要な示唆を与えるものである。ただし、イリイチの示すように当時性別役割分業がジェンダーによる差別ではなかったといえるかどうかについては、疑問も投げかけられるし、近世も含めて共同体が暖かいものであったとするのも、今から見ての理想化である面がある。個人の覚醒が進んだ現代にあって、過去への回帰は不可能である。そのなかで、今日の問題を歴史の中に位置づけることによって相対化し、新たな道を探ることが課題となっているのである。このことを念頭に置きながら本書を読むと、多くのものを得ることができるのではないであろうか。研究書としても、読み物としても、ひきつけるところが多い書である。